

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	學徒出陣の記
Author(s)	總務部
Citation	龍南, 254: 5-9
Issue date	1944-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8562
Right	

學徒出陣の記

總務部

去る九月廿二日、「國內態勢強化方策」が情報局より發表されるや、東條首相は當夜ラジオを通じて全國民に檄する所あり、特に我等學徒に對しては、

「學徒諸君、征くものも、殘る者も、克く國家の要求に徹してそれ／＼の分野において戰爭完遂に渾身の勇を致し以て決戦下帝國青年の意氣とその實力とを、遺憾なく發揮して戴きたいのである。」と學徒の奮起を要望されたのである。

聖恩のもと、學園の安きに身をおきつゝも、學徒がこの時のために鍛へに鍛へ、練りに練つた我と我心もて國難に殉ずるの秋は遂に來たのである。決戦の様相は日に凄絶を加へ、海に陸に將又空に皇軍將士の勇戦死闘は續く、正にこの秋學徒が上に出陣の大命は下つたのである。聖恩の鴻大唯々感泣、粉骨碎身皇恩の萬一に報い奉らんのみ、ひたすらなる積年の研鑽は只この日のためのものであつたのだ。

皇國三千年の歴史を顧み、悠久の大義に生きんとする學徒の愛國心は凝りて奔騰し、雄渾なる氣魄と頑健なる体驅とを提げて、只征かん哉の熱情は迸る。

わが龍南にあつても、五十年の傳統あり、剛毅木訥の眞精神に徹し、五高生たるの自覺と矜持に生き、協心戮力以て負荷の大任を完うするを以て任じた龍南健兒、今こそ、傳統の五高魂の心髓を發揮すべき時は來たのである。熱腸久しき文科生五十有餘の鬪魂は彌が上に昂揚し、後に續く者亦快哉を叫んだのである。而して中に理科二年中林敏郎君は愛國

の熱情抑へ難く、第一乙に合格するや、本籍聯隊區司令部宛血書の入營嘆願書を提出せるも、理科生は退學せざれば入營許可せられざるを知り、欣然退學の手續を取つて之に應ぜるなど、涙ぐましい挿話すら生れたのである。而して龍南は一丸以て宿敵擊滅への進軍譜を奏でたのであり、十月十三日、壯行會開催さるゝに及んでや、正に愛國の意氣冲天、若人の憂國の至情は最高潮に達したのである。

午後一時、講堂に集へる全龍南人の眉宇に秘められた擊滅魂は唯沸騰し、學校長の壯行の辭、次いで職員代表竹原教授、生徒總代森理科代表幹事の挨拶に續いて、征く者を代表しての棧文科代表幹事の答辭には講堂只肅正に靜中有動、感激の増塙と化したのであつた。茲に棧君の答辭を再録してみよう。

答 辭

天高く雲流る。悠久の天地を他に世界史は躍動す。その最中に我ら征く者にとりて、かくも盛大なる壯行の會を開かれ、我らの感激大なるものあり、我らこの感激を心に銘じ諸先生始め全龍南人の期待に背かざるの覺悟あらざるべからず。

あゝ我等征く、我等に三千年來、富士の高嶺を仰ぎ見て元寇、日清、日露幾多の國難に堯爾として散り行きし祖先より傳へ受け今尚脈々と波打ち流るゝ大和民族の血潮あり、加ふるにこゝ龍南に於て血涙もて培ひし剛毅本訥の心あり。而して背後に龍南人諸兄との固き心の結びあり、我らこの鐵石心もて山嶽崩すべし海鰐すべし。夷狄何するものぞ。我等未だ學終へず業成らず。されど晴れて召さるる日本男子の名譽何ものか之に過ぐ。惟ふに學は書室に籠り書籍のみによるもの、之その本然の姿に非ず。自らの知とは自己の力に依り創成せられ築き上げられし學的組織体形を言ふなり、之こそ自己の血となり肉となれる「生ける知」なり。悦しき哉。幸なる哉。我ら今眞の學習の道を與へらる。

我ら出陣の天爽けく晴れたる朝、坦々たる心のまゝに豊に微笑みて家門に立ち見送らむ父母に、かく語らむ。「右手に

劍とり、左手に筆捨つることなし。戦ひ且學ばん。」と。

諸氏しばし偲べ。或は愛機に打乗り、南溟の空、玄冥しきりに荒れ狂ふ最中を雄々しく翹き、或は野菊咲き薫る曠野遙々と渴に苦しみつゝ越え行かむその頃、この龍南にては兄等致々として學に専心し、赤壁の城松の緑に映えて儼然全國を睥睨しあらむ。されど征くも残るも龍南に笈を負ひ多數先人に依りて錦上更に花を添へられし剛毅木訥の精神に生くるものなり。我ら艱難に生きむ。

我ら敵彈被り先づ兩脚もぎ奪はるれば、兩手もて搔き進まむ。その兩手更に飛び散らば根限り休ゆすぶりて横轉し以て敵陣に肉薄せむ。身体敵彈に碎くれば齒に草かみ、鮮血にまみれ、骨碎け亂れて形とてなきこの軀を引きずり行かむ。遂に顔面に彈受け、口に物嚙む力なく、進む能はず生命絶つとも魂もて敵陣に飛び行かむ。千萬人と雖も我行かん哉。我に後顧の憂なし。

龍南五高は光と永久に榮ゆるなり。我ら學園の内外道は異れど、相呼應し以て光輝ある五高史を汚すまじ。而して大和民族永遠の發展に獻身せむ。

さらば我ら征く。再び相見ゆる事なからん。されど七度生れて君國に報ぜん哉。

最後に諸先生より頂きし御鴻思に厚く感謝しその御健康と將又諸兄の御多幸とを心より祈り、重ねて龍南人たるの自覺もて戦はむことを誓ふものなり。

燕辭以て答辭となす。さらば。

昭和十八年十月十三日

代表 棧 熊 獅

この氣魄、この熱情、これこそ我ら龍南人が日夜致々として求め來りし所のもの。今棧君の答辭に、征く者も残る者も共に一心同体、赤き愛國の至情に燃えたのである。そこに言葉はない。只魂と魂とが打合ふのであつた。そして最後

の武夫原。

だが惜しむらくは青史に、龍南史上に輝しき學徒出陣を送る雄渾なる歌のなかりしことである。茲に當部は壯行歌募集を企てしも種々の都合に依り募集期間等に制限されたのは誠に遺憾であつた。然るに應募歌詞十數篇、いづれも學友を送る熱情に溢れ、新世紀の若人の息吹に接したのである。かくて上田、高森、藤井三教授の嚴選を経て、文一ノ四、木庭立夫君の歌詞を得、次いで音樂部（主として理二ノ四、高津幸弘君）に作曲を委囑し、十一月十八日、發表會を開くに至つたのである。

かくて十二月一日は來た。大東亞戰爭二周年の感激の日、八日を前に、我等の學友は肅々として營門を潜つたのであつた。頑敵米英が量を持んでの必死の反攻に喘ぐとき、召令に應じて蹶然起つた學友の胸中や如何。必ずや澄めること鏡の如く淡々として、しかも米英斷じて撃つべしの固き決意に燃えてゐたことであらう。

入營後の學友は忙中閑を見出しては、我等に便りを寄越して呉れた。我等はその度毎に暖い學友の友情に胸ぬち熱いものを禁じ得なかつたが、分けても學友の雄々しい生活意慾と若人らしさの失はれざる情熱とは、強く我等を鞭つものがあつたではないか。

我等亦學友に續いて起たねばならぬ。我等は只年齒滿たざるが故に、又國防科學建設の要員として、學を續け得るだけである。我等が學友は已に祖國の急に馳せ参じたのである。我等この儼然たる現實を看過するか如きことあつては斷じて申譯たゝぬ。何時、お召しがあらうとも、強靱なる氣魄と肉体とを以て御奉公申上げ得る様、平素の精進を勵まなければならぬ。

見よ、頑敵米英は、マーシャルに來れり。量を持つ米英、強引にして又無謀とまで思はれる敵の反抗は決して侮り得るものではない。

神州は斷々乎として不滅である。神州を斷々として護らねばならぬ。今や全てを宿敵米英擊滅の一點に集中されなく

てはならない。我等この現實を逃避せんとするが如きは正に罪死に値すると言へよう。

龍南人よ。既に覺悟は出來てゐる。いざ起たう。起ちて米英撃滅へ我等の高校に活を集中しよう。かくしてこそ決戦下の學徒の姿であり出陣の學友に報いる所以ではなからうか。

又、去月廿一、二の兩日に亘つて我等總務一同は、市内の部隊を訪ひ、學友先輩を激勵慰問したのであつたが、彼等は皆見ちがへる程の体軀の持主となり、その双眸は若き知性と不拔の意志を輝かしてゐた。彼等は日夜、猛訓練を重ねてゐる。しかも明朗にして快活な兵隊さんになり切つてゐる。部隊長は學徒兵に期する所大なるを訴へ、我等の努力を要望すること切なるものがあつた。

我等は這般の事情を考へ、決して――先輩學友に負けることなく、又恥をかゝせることなき様、頑張らなくてはならない。完き一兵となるには、先づ完き一學徒としてあらねばならぬ。あれを思ひ、これを思ひ、綴り合せた記録は雜然たるものとなつたが、之を以て學徒出陣の記に代へる次第である。